地蔵尊の宗教 ⑧

国際教養大学特任教授　金岡秀郎

地蔵尊を祀る寺院とその意味

仏教の寺院はいかなる理由で建てられてきたのであろうか。仏教が興起したインドでは、ブッダやその弟子の修行・布教のために富豪の寄進したヴィハーラが寺院の起源となった。ヴィハーラはもともと散策する土地を意味し、のちに僧院を指すようになって、精舎と漢訳された。竹林精舎や祇園精舎などの寺院がインド最古の例であり、とくに後者は『平家物語』の開巻の一節で日本人にもよく知られている。僧侶が起居するヴィハーラに対し、尊像などを祀った場所はチャイティヤといった。チャイティヤは山や丘陵を掘って造った石窟寺院で、人々が参詣する霊廟や祀堂の役割を果たした。仏教の広まりとともにインド以外の地に建てられた寺院も、基本的にはヴィハーラとチャイティヤの要素を合わせ持っているといえよう。すなわち、僧侶の修行・布教および信者の信心の場としての寺院である。

大乗仏教が造寺・造塔や読経・写経の功徳を説くようになると、外護者といわれる仏教護持の有力者が世界各地でこぞって寺院を建てるようになった。梁の武帝の同泰寺や南モンゴルの君主アルタン・ハーンのダー・ジョーなどの諸寺院はそうした性格が強い。日本では奈良時代の聖武天皇が外護者として名高く、その施策によって東大寺を中心に全国に国分寺や国分尼寺が建てられた。それらの寺院は、仏教による国の発展と安全を祈る鎮護国家の思想を有していた。

仏教の重要な思想である供養もまた、多くの仏寺建立の由縁になってきた。トゥルナン寺とかラモチェ寺といったチベットでもっとも由緒ある寺院は、チベット建国者であったソンツェンガンポ王の死後の菩提を弔うため、寡婦の王妃らが建立したものと伝えられている。日本の四天王寺も、崇仏・排仏をめぐる物部合戦で滅ぼされた物部氏の鎮魂・供養のために聖徳太子が建てたとされている。

こうした名刹の縁起とは異なり、日本においては仏教の教理のみで説明できない、日本固有の信仰を背景に建立された寺院が少なくない。前回述べたように、日本の地蔵尊は仏教の菩薩思想と、土着の神である塞の神が習合した信仰を持ち、慈悲の菩薩であるとともに、悪霊や妖怪の日常への侵入をふせぐ守り神の役割を担ってきた。ここでは、そのような性格の地蔵尊と縁の深い寺院を見てみたい。

地蔵菩薩立像（通称有喜地蔵・薬王院大本堂）

京都の五条橋を東に渡って鴨川を越えると、すぐに洛外の六原が広がり、さらに東に進むと鳥辺野・鳥辺山にいたる。古歌に見える鳥辺山の煙は人を火葬したとき昇る煙で、人の世の無常の喩えとしてしばしば歌われてきた。平安時代以来、鳥辺野は火葬の場として知られ、「この世」である都の人々にとって六原一帯はまさに「あの世」であった。あの世とこの世の境にあたる六原には桂光山西福寺があり、その場所は六道の辻と呼ばれてきた。六道はさきに見たように地獄を含む六つの生まれ変わりの世界をいう。

西福寺の本尊は阿弥陀如来であるが、創始は弘法大師が建立した地蔵堂と伝えられる（丘眞奈美『京都奇才物語』PHP新書）。西福寺の地蔵尊は、鳥辺野から都への出入り口となる六道の辻で死者の世界を塞ぎ、都人を悪鬼・悪霊から守る「ほとけ」として信心されてきた。また、西福寺の北にある六波羅蜜寺は市聖として有名な空也上人が建立した寺で、六波羅は地名の六原に通じるとされる。六波羅蜜寺の本尊は空也自ら刻んだとされる十一面観音であるが、この寺は地蔵尊とも縁が深い。南北朝時代の『地蔵菩薩霊験記絵巻』には、六波羅蜜寺に徒歩で向かって行く地蔵菩薩の姿が描かれている（川崎純性・高城修三『六波羅蜜寺』淡交社）。地蔵尊はこの地で人々を守るためにパトロールをしているかのようである。

関東の古都・鎌倉にも京都の六道と似た、あの世とこの世の境界があった。由比ケ浜が連なる相模湾から内陸に入り現在の鎌倉駅から北へ上ると、かつて地獄谷と呼ばれた地にいたる。地獄谷はまた谷戸と呼ばれ、処刑場と刑死者の埋葬地であった。刑死者のような横死者は、悪霊となって生きたものを襲う恐れがあるため、そこに地蔵尊を祀る心平寺が建てられた。心平寺はのちに廃寺となったが、同じ場所に北条時頼によって建てられたのが臨済宗の名刹・建長寺である。建長寺創建の際に心平寺の地蔵尊も移され、時頼はあらためて丈六の地蔵菩薩坐像を作らせて本尊とした（高井正俊『建長寺物語』四季社）。禅宗寺院は釈迦如来を本尊とするのが通例であるが、地蔵尊を本尊とした建長寺には、仏教のみならず日本固有の地蔵尊信仰が秘められている。

高尾山天狗まつり

五月十八日（木）

精進料理の集い

春の高尾山 寺コンサート

アルテコンボと日原史絵さんによる音楽劇『猿神』

去る四月二十一日と二十二日に、演奏と精進料理を楽しむ「春の高尾山　寺コンサート」を開催致しました。両日合わせて二百名以上の方々にご参加頂きました。

コンサートでは、八年振りにフランスから来日された、木管五重奏グループ『アルテコンボ』の皆様と、箏・三味線奏者の日原史絵さんにより、日本の童謡やクラシック演奏が行われ、最後に二組共演で、音楽劇『猿神』が演奏され、聴衆はその音色に魅了された。